

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

曾 徳 興

一. 文字改革の背景

よく知られているように、中国は10億近い人口を持つ国で、541種類の方言が全土に散在し⁽¹⁾、文字で表現する時はほとんど同じ漢字を用いるが、言葉（音声面）として話をする時は、互いに異邦人同士みたいに言葉が通じない場合がしばしばある。又中国の文字文化は従来の人口の二割であって、五千年の歴史は庶民のものではなかった。かつて「文字の国」であるといわれたが「文字なき国」でもあった。その文盲率は1930年の推定では、都会地における文盲率は60%、農村は90%といわれ、平均文盲率は八割以上というあり様だった。勿論この原因はただその風土の分裂性のみならず、庶民教育を忘却した挙人進士のための、科挙の制度⁽²⁾であると指摘されているが、さらに一つは、漢字の障害つまり漢字や漢文の難しさに原因があると言えよう⁽³⁾。

このように方言の多様性と文盲率の高さの問題が漢字改革の背景をなしたことは、言うまでもなく、中国の漢字改革の特殊性をなすものである。方言の多様性の問題から民族共通語の設定が急務となり、文盲を撲滅するためには教育と直結した文字改革が必要となってくる。

1919年五四運動⁽⁴⁾の時、胡適、錢玄同によって提唱された「白話文」つまり北京語音を中心とする口語体が全国を結ぶ共通語となった。今まで庶民との縁が薄かった文言文（古文）から口語に近い文字表現が可能になったのである⁽⁵⁾。

五四運動までの発音方法を考察してみると、その粗末さがわかる。例えば字引きでは、「義」の読み方を「衣」と書いてある。「種」は「中」と同じように読む。

つまり同音文字によって、たがいに音を示しあういわゆる「直音」方法である。もう一つの方法は「反切」という方法であるが、例えば「通」の発音を「他紅」の二つの字に求めることができる。他（タア）の前部の「タ」と紅（ホオン）の後部の「オン」を組合せると「タオン」という発音になる。これが当時の発音というものである。しかし現代中国語では、「義」の発音は「ㄧˋ」或いは、「yì」, 「衣」は「ㄧ」或いは「yī」と表記され、「種」は「ㄓㄨㄥˇ」或いは「zhǒng」, 「中」は「ㄓㄨㄥ」或いは「zhōng」と表記されている。つまり表音文字（二種類）の組合せによって読音をはっきりと表わすのである。又その上部に「声調」（四声）⁽⁶⁾がつくものである。

言い換えれば、現代中国語の発音は「北京腔」（北京弁）⁽⁷⁾をもとにして作成されたもので、白話文とともに五四運動後の産物であると見てよからう。

二. 発音表記法の制定と変遷

この現代中国語の発音表記法を大別すれば次の二種類を挙げることができよう。

（Ⅰ） 注音字母

「注音字母」（表Ⅰ参照）は、日本語の片仮名のように漢字の偏旁を取り出して作った中国独自の表音文字であるが、その後反对者が出たため、「注音符號」と改正され、つまり文字として認められず、一種の発音記号としてしか認められなかったのである。その成立の経緯を歴史的にたどって見ると次のようになる。

1913年：中華民国成立直後、国家統一国音統一の必要から組織された読音統一会（盧懋章、王照等皆参加した）が「注音字母」を作った。

1918年：教育部（文部省）により正式に公布された。

1919年：教育部により「注音字母音類秩序」を公布し、改めて字母の順序を決めた。

1920年：審音委員会が「ㄘ」という新しい文字を加えた⁽⁸⁾。

1922年：教育部により「注音字母書法体式」を公布し、四角点声法⁽⁹⁾を廃止し

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

て、声調記号（四声記号）に変えた。

1923年：北京語を国語とすることが正式に決められ、国語統一準備委員会がその方針に沿って改正した。

1928年：北京大学研究所（北京大学大学院）により「注音字母」が公布された。

1930年：「注音符号」と改正された。

注音字母が考案された当初は、39個の注音文字があったが、現在は実用性に乏しい幾つかの鼻音のものが取りはずされたため、「声母（子音）21個と韻母（母音）16個とを合わせて37個になった⁽¹⁰⁾。

北京語音を綴る場合、「中国切音字母」は63個の文字（子音21、母音と半母音42）を用いる。「官話字母」は62個の文字（子音と半母音50、喉音つまり母音13）を用いるが、「注音字母」は37個の文字（子音21、母音16）以外は使用しない。音節綴方の上では、すでにその他の「漢字筆画式切音方案」⁽¹¹⁾よりも一歩前進した。

注音字母は中国の初めての漢語表音文字である。1920年から小学校に導入され、小学校国語教育の一環をなした。前後40年間、注音字母は、漢字読音の統一、国語運動、発音知識の普及に対して大きな役割を果たしてきた⁽¹²⁾。

注 音 字 母							
声 母 (子 音)				韻 母 (母 音)			
ㄅ	ㄆ	ㄇ	ㄌ	ㄚ	ㄛ	ㄜ	ㄝ
ㄆ	ㄑ	ㄒ	ㄎ	ㄝ	ㄟ	ㄞ	ㄟ
ㄎ	ㄎ	ㄎ		ㄟ	ㄟ	ㄟ	ㄟ
ㄌ	ㄌ	ㄌ			ㄟ		
ㄊ	ㄊ	ㄊ	ㄋ	ㄟ	ㄟ		
ㄊ	ㄊ	ㄊ	ㄋ	ㄟ	ㄟ		
ㄊ	ㄊ	ㄊ	ㄋ	ㄟ	ㄟ		
ㄊ	ㄊ	ㄊ	ㄋ	ㄟ	ㄟ		
ㄊ	ㄊ	ㄊ	ㄋ	ㄟ	ㄟ		
ㄊ	ㄊ	ㄊ	ㄋ	ㄟ	ㄟ		

(表 I)

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

当時祁建華氏が「速成識字法」を創って、軍隊の中で試みた。組織のある良い条件の下に150時間以内に1,500～2,000字という早い速度で漢字を覚えさせることに成功した⁽¹³⁾。注音字母を用いて、漢字と語音を結合させたことがこの「速成識字法」が成功したキーポイントである。この方法は「注音字母」が漢字を覚えるのに役立つ重要な条件の一つであることを証明したのである。換言すれば、注音字母は漢字と語音を結合させるためのかけ橋となったのである⁽¹⁴⁾。

この注音字母は言語学的によくできていること、及び三字以内で表記できるという実用性と便利さもあって、一時国語運動の主流になった⁽¹⁵⁾。現代の中国語辞書にはもちろん、中日辞書の中にもこの注音字母を取り入れないものは、恐らくないだろう。

しかしながら、40余年間も普及につとめられた注音字母は、結局注音符号としてしか使用されなかった。小学校低学年には用いられるが、それ以後になるともうあまり用いられなくなり、小学校卒業後は、小学校の教科書と同じように捨てられる運命になった。又中学⁽¹⁶⁾程度以上の知識人も注音字母を使用するものは非常に少い⁽¹⁷⁾。その原因は恐らく注音字母自身が持つ幾つかの欠点にあると思う。その欠点を挙げると次のようになる。

① これらの字母（文字）は同じ大きさであるから、分別しにくい。これらの字母はほとんど正方形で、外観から見るとそれほど違わない。

② 注音字母の中に似ている文字が多すぎる。例えば「ㄗ ㄘ」、「ㄌ ㄋ」、「ㄨ ㄣ」、「ㄨ ㄣ」……等がそれである。

③ 形が同じものであるため、読む時に余計に神経を使い、早読みが難しい⁽¹⁸⁾。

これがために注音字母はそのまま単語や文章の中に用いられることなく、あくまでも発音の確認、読み方の補助としてしか使われないのである。つまり日本語の仮名、朝鮮語の諺文⁽¹⁹⁾又は欧文のローマ字のように表音文字として単語や文章の中に使用されているものと違って、補助的且つ独立的な性質を有するものである。

1930年「注音字母」は「注音符号」に名を変えられた。ここで注音字母は名実

ともただ単に文字以外の「音標符号」に過ぎないものとなった。注音字母が結局「注音」という範囲から一歩も外へ出なかった一番大きな原因は、上に述べたようにそれ自身のもつ技術的な欠点のみにあるのではなく、それを応用する人々がその用途を制限したところにもある。確かに用途上、注音字母は切音運動者の最低限度の要求しか発揮できなかったが、しかし、歴史的に見れば、注音字母ができたことは、中国にとって三千余年の文字史発生制度の変化の始まりであり、表音文字化への第一歩を踏み出したのである⁽²⁰⁾。

(Ⅱ) ローマ字表記法

ローマ字表記法(表Ⅱ参照)は「拼音字母」とも呼ぶ。国共分裂後の1957年に中国政府の國務院の議決を経て、正式に制定公布されたもので、現在中国大陆全土に使用されている発音表記法である。

しかしこのローマ字の成立にもその歴史的プロセスがある。その成立の淵源を求めてみれば、次のようである。

1929年：シベリヤにいる中国人労働者を教育するために、瞿秋白氏がローマ字を考案し、同じ年に「中国拉丁(ラテン)式字母案」を発表した⁽²¹⁾。

1930年：瞿秋白氏はこれを改良して、「中国拉丁化的字母」にした。

1931年：海參威(vladivostok. ウラジオストック)で中国新文字第一次代表大会が開かれ、「中国漢字拉丁化的原則和規則」を議決したので、これを「中国拉丁化新文字」(中国語表音ローマ字)⁽²²⁾と呼ばれた。

1932年まで：この新文字で出版された各種の読物は10万部に達し、ソ連にいる華僑に一人一冊に足りる部数であった⁽²³⁾。

1933～1934年：上海の語学専門家がこの新文字を国内群衆に紹介したところ、直ちに熱烈な歓迎を受けた⁽²⁴⁾。

1935年：688名の文化界のリーダーが連名で「我們对于推行新文字的意見」を発表した。これは積極的に中国語表音ローマ字を擁護する意見書である⁽²⁵⁾。

1934～1937年：上海、北京、西安、重慶、漢口、広州等20余カ所で70余の団体

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

が成立し、60余種類の書籍、30余種類の期刊が出版された。この時期に「各方言拉丁化方案」も決められ、寧波、上海、福州、アモイ、広州、客家等13種類が含まれている⁽²⁶⁾。

1949年：中華人民共和国成立後、北京で「中国文字改革協会」という研究者団体が発足した。

1952年：教育部に「中国文字改革研究委員会」が設立された。

1954年：国務院の直接指導の下で「中国文字改革委員会」が成立し、中央政府が“文字改革”の専門機構を設置した。

1955年：中国文字改革委員会が「拼音方案委員会」を設立したが、その主要な仕事は「拉丁字母式拼音方案」の初稿を創るためである。同年中国文字改革委員会と教育部が連合して全国文字改革会議を召集した。この会議内での収穫は、「漢字簡化方案」の修正⁽²⁷⁾と「普通話」を押し広める旨の決議をしたことであった⁽²⁸⁾。

1956年：中国文字改革委員会が「中国拉丁化新文字」を基礎にした「漢語拼音方案」を発表した。

1957年：「修正草案」⁽²⁹⁾が作られ、国務院で議決された。

ローマ字表記法（拼音字母）							
子 音				母 音			
b	p	m	f	a	o	e	ê
d	t	n	l	ai	ei	ao	ou
g	k	h		an	en	ang	eng
j	q	x		er			
zh	ch	sh	r	i	u	ü	
z	c	s					

注：比較しやすいため母音をも注音字母に合わせて並べた。 （表Ⅱ）

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

1958年：全国人民代表大会で批准され、ここに「漢語拼音方案」が正式誕生したわけで、一般には「拼音字母」（ローマ字表記法）と呼ばれている。

しかしながら中国の漢字をローマ字で表記したのはなにも1929年が一番始めであったというものではない。歴史をさかのぼって見ると19世紀半ば頃から英国人トーマス・ウェード (Thomas Francis Wade)⁽³⁰⁾ によって考案されたことがあり、いわゆるウェード式ローマ字(Wade-Giles 式)である。1867年に彼は「語言自邇集」(A Progressive Course designed to Assist the Student of Colloquial Chinese)を書き上げた。これこそローマ字による最初の発音表記法である。1898年に、英国人ハーバート・ジャイルズ (Herbert Allen Giles)⁽³¹⁾が編纂した「大字典」(A Chinese-English Dictionary) の中ではこのウェード式ローマ字を使用されていた。これを契機としてウェード式ローマ字は英語世界を始め広く世界的に用いられるようになった。現在でも英語文献の中では中国の固有名詞に関するローマ字表記は、依然としてこのウェード式ローマ字が使用されている。

ウェード式 ローマ字							
子 音				母 音			
p	p'	m	f	a	o	ê	e
t	t'	n	l	ai	ei	ao	ou
k	k'	h		an	ên	ang	êng
ch	ch'	hs		êrh			
ch(ih)	ch'(ih)	sh(ih)	j(ih)	i	u	ü	
ts(ü)	ts'(ü)	s(sü)					

(表Ⅲ)

したがって同じローマ字表記法と言っても二種類あるわけで、はっきり区分するとウェード式の方を“旧ローマ字表記法”，拼音字母の方を“新ローマ字表記法”と呼んだ方が一層わかりやすいかも知れない。

ローマ字表記法の優点を述べるとすれば、まず取り上げるのは表意文字から表音文字へ進ませたことである。象形文字を放棄して、表音文字について行くことは、もともと文字発展の必然的過程である。言語学家サピアー(Edward Sapir)⁽³³⁾がかつて次のように言った。「書く技術を進歩させたかったら、元来創造文字に頼っている象形原則を放棄しなければならない」。文字発展の前途は、実際言えば一種の需要に応ずる自然の力であり、「欽定」⁽³⁴⁾のなにものでもない⁽³⁵⁾。

ローマ字表記法の表音文字は26字しかないので初心者にとって漢字よりも覚えやすいから、文盲撲滅運動に役立つのである。トルコが新文字を採用してから二年もたたないうちに、字を全然知らない文盲でも間もなく新聞や雑誌を読めるようになったのは約二百五十万人もいたそうで、これは元来の識字者の三倍以上である。ロシアも文盲を一番多くかかえている国家であったが、1913年代、識字者はわずか33%に過ぎなかったが、革命後ラテン化文字を採用したお蔭で1931年までに識字者はもうすでに90%まで上昇した。これらの実例を踏まえて中国もローマ字表記法の採用によって文盲を一掃することが期待できよう⁽³⁶⁾。

ローマ字表記法は漢字の持つ特長である単音節の字を複音節の字に変えた。例えば Wō men dào zhèlǐ lái gōngzuò. (我們 到 这里 来 工作) 中国語の「詞」という意味は単語であるが、1字だけではなくて、2字以上の字(辞に通じて用いられる)が組み合わさって一つ概念をなしているのもある。つまり複音節のものも少なくないということである。これらの複音節のものを漢字で表現するよりもローマ字で表現した方が合理的であることを称える論者もいる⁽³⁷⁾。

以上はローマ字表記法の優点を述べてきたが、しかしその反面、幾つかの問題点が潜んでいることをも見逃してはならない。

① ローマ字表記法は新旧二種類があるので混同しやすい：現在中国本土において、国語教育として使用されているのは新ローマ字表記法であるが、前にも述べたように実際欧文文献の中、又は現今の英字新聞、雑誌の中においても中国に関する固有名詞は、依然として旧ローマ字表記法(ウェード式ローマ字)を使っている。例えば：

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

旧ローマ字表記法

新ローマ字表記法

Suchúan	Sìchuān	(四川)
Kuangēhou	Guǎngzhōn	(広州)
Kansu	Gānsù	(甘肅)
Hsingan	Xīngan	(興安)
T'ienchin	Tiānjīn	(天津)
K'ungtn	Kōngzǐ	(孔子)
Lipai	Líbái	(李白)
Yuan shih-k'ai	Yuán shì-kǎi	(袁世凱)
Sun chung-san	Sūn zhōng-sān	(孫中山)

② ローマ字表記法は発音表示を一層複雑にした：つまり一つの発音記号で済むものを二つないし三つにした。例えば：

注音字母	旧ローマ字表記法	新ローマ字表記法
ㄔ	chi	zhi
ㄌ	êrh	er

③ ローマ字表記法は矛盾する個所が沢山見られる：注音字母の「ㄔ」(ツ)が新ローマ字表記式では「r」と表記されているが、「ㄌ」(アル)も「er」と表記されている。つまり同じ「r」にしても前者と後者の発音が違うわけである。発音が違うもので同じ「r」と表記されるのは矛盾である。「ㄍ」(ガ)と「ang」(アン), 「ㄏ」(ハ)と「sh」(ス), 「ㄐ」(チ)と「zi」(ツ)等にも同じ矛盾を感じる。確かに欧文にも同じ個所が見られるが、例えば英語の good の「g」と morning の「g」との発音が違う。ところが発音では国際音標や別の音標文字を採用しているのがほとんどであるから、問題にならない。中国のローマ字表記法にはそれがないから矛盾を感じることになる。

④ ローマ字表記法は中国漢字の「一字一音一義」という特色を抹殺する：中国語は孤独語である。その特色の一つは単音節語の性質をもっていること。つまり一つの音節が「四声」(声調)を伴って発音され、それが一つのまとまった意

味概念をもち、一つの漢字で現わされる。簡単に言えば「一字一音一義」という特色が強いということである⁽³⁸⁾。例えば「寄件人」(発送人)は三つの漢字とも各々の意味合いがあって、独立することもできるものであるが、ローマ字表記法にすれば欧文のののように「jijianren」と連なって表記され、一つの単語としての意味しかとられない。これが中国語の「一字一音一義」という特色を抹殺してしまう恐れがある。

三. 文字改革の展望

以上注音字母並びにローマ字表記法の問題点を論じてきたが、いずれにしても中国文字の改革は長い且つ遠い問題である。中国の文字自体の発展過程から見れば「象形」から「形声」、表意から表音になったことは世界各国の文字発展の一般趨勢に沿うものである。中国の文字が表音化に向けて歩き出したことは各方面にとって便利である。例えば口語体で書くとか、タイプで打つとか、他民族や外国との文化交流にしても、又はその言葉を吸収するにしてもかなり便利になってくる⁽³⁹⁾。特に初心者や小学校の低学年者にとって必要なものであるかも知れない。しかし、教育水準がある程度まで達すると、逆に表意文字(漢字)が必要となってくると思う。なぜならば、表音文字だけでは分別できないケースが出てくるからである。つまり「同音字問題」である。韋怒氏が言ったように「我々の目の前に又沢山の困難が横たわっている。その中に一番困難であるものは同音字問題である」。例えば「單純詞」(単音節単語)である「jīn」(ㄐ ㄣ)という発音の字だけをみると十幾つもある: 尽, 浞, 苙, 焮, 赈, 进, 近, 斬, 矧, 勁, 浸, 寢, 晋, 搢, 禁, 噤, 覲……。もし四声を考慮しない「jin」(旧ローマ字表記法は chin と表記するが四声を全く取りつけない)だとすれば、巾, 今, 衿, 矜, 斤, 金, 津, 祲, 筋, 襟, 仅, 緊, 堇, 谨, 僅, 瑾, 瑾, 瑾, 瑾, 瑾……等を加えるとその数はなんと五十近くもある。中国人の苗字について、各専門家の収集を統計してみると約三千余(「百家」を遥かに越えている)もあるのだそうで、比較的に同音が多いのは「yi」という苗字である⁽⁴⁰⁾。第一声 8, 第二声10, 第三

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

声 7, 第四声22 (易, 羿, 义, 弋, 益, 翼, 佚, 掖, 刈, 意, 异, 懿, 逸, 邑, 繹, 譯, 驛, 奕, 亦, 艺, 翳, 裔)⁽⁴¹⁾。つまり発音で「yi」(イ)様と呼んでも、実際異なるイ様は47名もいるわけで、分別できるものではない。複合詞(複音節単語)についても同じことが言える。「jìdòng」と読んでも「激动」, 「机動」……等複数の意味がある。同じ例を拾って見ると

shíshì	(尸 尸)	实事, 时事
shéton	(尸 舌 太 又)	舌头, 蛇头
bìhuà	(ク イ 尸 又)	笔划, 比划
bùxíng	(ク 又 尸 又)	不行, 步行
shíyòng	(尸 又 尸 又)	适用, 试用
shōnhuò	(尸 又 尸 又)	收获, 收货
quānlì	(ク 又 尸 又)	权力, 权利
dàlù	(ク 又 尸 又)	大陆, 大路
mǔjī	(尸 又 尸 又)	母机, 母鸡

のように非常に区別し難い、章炳麟氏⁽⁴²⁾は「表音文字は同音詞があるから、文字として成り立たない」と言って表音文字に反対したことも理解できよう⁽⁴³⁾。

日本語にも表音文字の持つ同音詞の悩みがある。例えば、「こうせい」の意味は、好晴、行星、坑井、更生、更正、高声、校正、硬性、鋼製、広西、皇政、荒政、曠世、孔聖、公正、江西、攻勢、苟生、厚生、恒性、恒星、後生、後世、控制、甦生、構成、興盛、薨逝、鴻声⁽⁴⁴⁾……等なんと30近くもある。なるほど日本が近年当用漢字や常用漢字を少しずつ増やしているのも無理はない。その裏には表音文字だけで頼り切れない原因が潜んでいるのではないか。

故に中国においても目前、注音字母やローマ字のような表音文字を以ってしては漢字を完全に代替することはできない。まして中国にとって漢字は民族を団結せしめ、思想観念を統一し、歴史文化を保持する最有力な要素であるから、これからも漢字を用い続けて行くだらう。呉玉章氏が自己批判の中に次のように言った「民族の特性と慣習を考慮しないまま漢字はただちに表音文字に取って代られ

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

と思ったが、それは事実上一種の現実からかけ離れた幻想である。……漢字はもうすでに長い歴史を有し、文化生活の上ではしっかりした基礎があるから、その改革は漸進的なものとならなければならない……」⁽⁴⁵⁾。言い換えれば、文字改革問題について現段階においては、せいぜい「漢字簡略化」の方向へ船をゆっくり進めて行く以外に方法がないと思う。

注

- (1) 中国語学研究会編、「中国語概論」p. 117. 北方（下江官話および西南官話を含む）387. 江浙（呉方言）46. 湖南（湖方言）26. 江西（贛方言）13. 客家20. 福建（閩）北7. 福建（閩）南15. 広東（粵方言）27. もっとも広く話されるものは北京を中心とする北京官話、西部官話、中部官話にわかれ、この語音の差異は、ほとんど相互の了解が困難である（全国 541 種類の方言の中に少数民族の言葉は含まれていない）。
- (2) 「科甲」又は「科第」とも言う、中国で行われた官吏登庸試験制度である。漢に淵源し、隋唐に始まり、清末まで続いた、この制度は秀才、進士、明経などの六科に分けられ、経典、詩文などを試験した。宋以後、科目は進士だけとなり、郷試、会試殿試を新設。清末、1905年に廃止となった。
- (3) 豊田国夫著、「民族と言語の問題」p. 333.
- (4) 第一次世界大戦後、パリ平和会議における山東問題の措置に憤慨した北京の学生約五千人は、1919年（民国8年）5月4日、全市にわたって反帝デモを行ない、政府に対して平和条約批准の拒否、責任者の処罰を要求した。これに端を発して全国的な排日運動、国家解放運動に発展し、中国の新生運動となった。学生の運動は労働者と結びつき、知識人、商人、労働者の組織が生まれ、新文化運動の導火線となった。この時代の文化運動を「五四運動」「五四文化革命」「新文化運動」などという。
- (5) 中国語文雑誌社編（中華書局出版）、「中国文字拼音化問題」p. 7（1952年7月）白語文は文盲撲滅に役に立たないと唱える反論者もいる。その理由は、自語文は語彙と語法両方とも、次第に人民大衆に接近しつつあることは間違いないが、しかし語音について、漢文が表音文字ではないから、字の構造だけでは読音を表わすことができない。（形声漢字も表音文字のように読音をはっきり表わすことができない）したがって漢字と語音との関連性が失われてしまう。これが人民大衆の文盲撲滅の識字運動に困難をもたらす。
- (6) 拙著、「最新中国語会話基本句型」（基礎編）p. 13.
中国語の声調は「四声」という、アクセントやイントネーションと同じものである。

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

第一声（陰平） — （注音字母は印をつけない）

第二声（陽平） /

第三声（上声） ∨

第四声（去声） \

- (7) 拉丁化出版社編訳部編（拉丁化出版社）、「中国文字拉丁化文献」p. 65.
中国中部の言葉は5声、広東語は8声、閩南（アモイ）語は7声、北京語は4声（声調については割に易しい）である。
- (8) 周有光著、「漢字改革概論」（文字改革出版社）p. 34.
- (9) 「四角点声法」は四角い漢字の各角に点の印をつけて四声を表示する方法である。
例えば、
。中 は第一声（陰平）
°国 は第二声（陽平）
語° は第三声（上声）
气。 は第四声（去声）
- (10) 周有光著、前掲書、p. 36.
- (11) 清朝末期から北京語音を綴るための文字を創造した案が数えきれない程ある。漢字の偏旁で以って作ったのをすべて「漢字筆画式切音方案」と称す（注音字母案もその中の一種である）。
例えば：1896年 蔡錫勇の「伝音快字」
1897年 王炳耀の「拼音字譜」
1900年 王 照の「官話字母」
1906年 盧慰章の「中国切音字母」
1906年 田廷俊の「拼音代字訣」
1906年 {楊 琼 の「形声通」
李文治
1908年 馬体乾の「串音字標」
1908年 章炳麟の「組文韵文」
1909年 刘世恩の「音韵記号」
1910年 鄭東湖の「切音字説明書」
- (12) 周有光著、前掲書、p. 34.
- (13) 郭沫若、「中国文字改革研究委員会成立会」での講話（1952年2月5日）
- (14) 中国語文雑誌社編、前掲書、p. 7.
- (15) 伊藤敬一著、「中国語発音の基礎」p. 19.
- (16) 中国の中学は高級中学と初級中学がある。高級中学は略して「高中」と呼ぶが日本の高校に当る。初級中学は略して「初中」と呼ぶが日本の中学に当る。

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

- (17) 周有光著, 前掲書, p. 83.
- (18) 「中国文字拉丁化文献」p. 64.
- (19) 諺文(おんもん): 朝鮮の文字, もと字数28(うち, 母音11, 子音17)後に3つを減じて現在は25字。
- (20) 周有光著, 前掲書, p. 37.
- (21) 1927年中国大革命が失敗した後, 再びソ連へ赴き, 吳玉章林伯渠, 蕭三及びソ連の漢字家郭質生(В.С. Колоколов), 龍果夫(А.А. Драгунов)等と共同研究してラテン化文字を作った説もある。
- (22) 中日大辞典, p. 819参照。
- (23) 吳玉章「新文字与新文字運動」の中の「中国新文字的創造」(1949年華北大学再版)史萍青(А.Г. Шпринцин)「有関中国新文字歴史的一章」(文字改革雑誌1962年9.10月)。
- (24) 1933年8月12日に焦風が上海で「中国語書法之拉丁化」(訳書)を紹介した。1934年言語科学雑誌の上に「中国語書法拉丁化方案之紹介」が載っていた。
- (25) 周有光著, 前掲書, p. 46.
- (26) 倪海曙著, 「中国拼音文字運動史簡編」, p. 142, 143. 方言方案が定められた時期: 寧波1934年11月; 潮州1935年11月; 四川1936年1月; 上海1936年2月; 蘇州1936年3月; 湖北1936年4月; 広西1936年4月; 無錫1936年6月; 厦門(アモイ)1936年7月; 客家1936年8月; 広州1936年10月; 福州1936年; 温州1937年4月。
- (27) 周有光著, 前掲書, p. 49.
- (28) 周有光著, 前掲書, p. 49.
- (29) 周有光著, 前掲書, p. 52.
- (30) T.F. Wade (1818-95) イギリスの外交官, 中国学者。1838年軍隊に入り, 極東派遣軍歩兵将校としてアヘン戦争に従軍。47年退役し, 上海副領事などをへて, 駐清特命全権公使(在職1871-83)となる。83年退官帰国。中国滞在中に集めた大量の中国図書をケンブリッジ大学に寄贈し, ついで同大学第一回の中国語教授に就任した(1888)。著書「尋津録」Book of Experiments, Hongkong 1859; 「語言自邇集」A Progressive Course designed to Assist the Student of Colloquial Chinese, London, 1867は中国語学習の最良書としてヨーロッパやアメリカに広く用いられた。現在世界的に通用している漢字のローマ字音写法(表記法), すなわち四声の区別を1, 2, 3, 4の数字をもって示し, 有気音と無気音の区別を'の記号の有無によって示すなどの方法はかれの創案で, 一般に「ウェード方式」と称されている。
- (31) H. A. Giles (1845-1935) はイギリスの中国学者, 1880年福州副領事を命ぜられ, 以来上海領事, 淡水領事, 寧波領事などを歴任し, 93年領事官生活より隠退。97年

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

ケンブリッジ大学の中国語教授に招聘され、トーマス・ウェードのあとをうけてその講座を司る。在任35年、1932年退職するまでイギリス東洋学界の権威として著述講演などに活躍した。学風は中国の旧説を墨守し批判的態度に欠けるが、穏健でとくに中国詩文の翻訳に巧みであった。A Chinese-English Dictionary, 1898; Confucianism and its Rivals, 1915のほか多数の著書があり、また「聊斎志異」「洗冤録」「仏国記」などの翻訳もした。

- (32) 実際言えばローマ字表記法は数十種類あるが、ただ利用されていないのがほとんどなので、その創案者或いは案の名だけを例挙すると次ぎのようである。

外国人によるもの

1. 利瑪竇 (M. Ricci) 1605
2. 金尼閣 (N. Trigawlt) 1626
3. 衛匡国, 1654 ?
4. 何大化 (Antoniusde Gouvea) 1671
5. 馬礼遜 (R. Morrison) 1815
6. 艾約瑟 (J. Edkins) 1857
7. 威妥瑪 (T. F. Wade) 1867
8. S. Couvreur, 1890
9. 馬提爾 (C.W. Mateer) 1892
10. 雷興 (F. Lessing と W. Othmer) 1912
11. 王炳耀, 1897
12. 朱文熊, 1906
13. 列孟楊, 1908
14. 黃虛白, 1909
15. 列繼善, 1914
16. 錢玄同, 1922
17. 趙元任, 1922
18. 周弁明, 1923
19. 林語堂, 1924
20. 周弁明第二式, 1945
21. 趙元任第二式, 1947
22. 国語ローマ字, 1928
23. 拉丁化新文字, 1931
24. 漢語拼音文字方案草案初稿, 1955
25. 漢語拼音方案草案代用式, 1956
26. 修正第一式, 1956

中国語の発音表記法に関する若干の問題点

27. 修正第二式, 1956
28. 漢語拼音方案, 1958
- (33) Edward Sapir (1884-1939) アメリカの人類学者, 言語学者, ドイツ生れ, アメリカ土語を専攻, 一般言語学の理論的研究に貢献。
- (34) 君主の命によってえらび定めること。
- (35) 中国文字拉丁化文献, p. 90, 91.
- (36) 同文献, p. 91.
- (37) 同文献, p. 67.
- (38) 伊藤敬一著, 前掲書, p. 6.
- (39) 郭沫若, 前掲講話 (1952年 2 月 5 日)
- (40) 中国文字拼音化問題, p. 8, 9.
- (41) 周有光著, 前掲書, p. 308.
- (42) 現代漢語 (北京大学編) p. 52.
- (43) 章炳麟「駁中国用万国新語説」
- (44) 広辞苑参照。
- (45) 呉玉章「中国文字改革研究委員会成立会」での講話 (1952年 2 月 5 日)。